

風景を読む

6000坪ぐらい広がる南斜面の道路側に、1列花が咲いている。1坪、畳2枚のスペース。

数株の野菊。ダリア。グラジオラス。そう、昔、小学校の教室に、よく飾られていたな。ふっと思い出す。透かして見るとその畝の奥には、赤じそ、長ねぎ、かぼちゃ、小さな西瓜もある。

散歩するあしが軽くなる。なつかしいという感情ほどではないけれども、昔なじんだ景色に偶然出会い、ほっと心がゆるんだのだろう。

奥にぽつんと在る住宅の構造から推測すると、花々とわずかな農作物の稔る区画は、40年50年と工事が入ってないかも。なにしろ、濡れ縁のガラス戸はサッシじゃなく木枠だ。

そういえば、ここらへんでは紀元前約2000年～3000年前の縄文土器が出土したんじゃないか。多摩川の支流のそのまた支流が溪流するここらあたり、地質学的には河岸段丘になっている。縄文人たちは川の幸、野の幸、丘陵の幸をもとめて暮らしていたのだろう。

熱暑の青空を見あげ、5000年前、6000年前と声を出して言ってみる。読者はどんぐりの実が喰えるって識っていた？ 俺はぜんぜん識らなかつたね。

但、灰汁（あく）を抜く大仕事があるけど。

花岡事件を生涯究明しつづけた作家野添憲治（1935-2018、享年83）は、山々の森林を観ると、植樹から幾10年経過してるか、枝打はしてるか、間伐作業をちゃんと実施してるか、下草刈をしてるかよくわかつたそうだ。

全国に点在する、1946年から数年実施の緊急入植開拓団の後日譚を取材しながら、列車の車窓に展開する風景を、そういうように読込んでいた。



伐採する

野添さんは日本林業労働のエキスパート、秋田県林業史の第一人者だった。なにしろ、新制中学校を卒業すると同時に、15歳になったばかりで、身にすこし障害がある父に連れられて、真冬の北海道、長野、福島の間奥に入ったのだ。出稼する少年伐採夫だった。

零下20度、30度の雪山に入りこみ、傾斜地に足を踏んばり、大鋸で切れ目を入れ、大鉞（まさかり）をふるう。重労働なんて話じゃない。

木の太さはだいたい120センチぐらいだけれど、なかには150センチ、180センチの巨木もあったそうだ。

読者はその超重量をイメージできようか。今日からざっと70年以前、日本林業ではそういう労働が行われていたのだ。

野添憲治のデビューは1968年、三省堂新書「出稼ぎ 少年伐採夫の記録」。現在は社会評論社から刊行されてるくみちのく・民の語り>シリーズ第4巻で読める。興味ある方はどうぞ。